

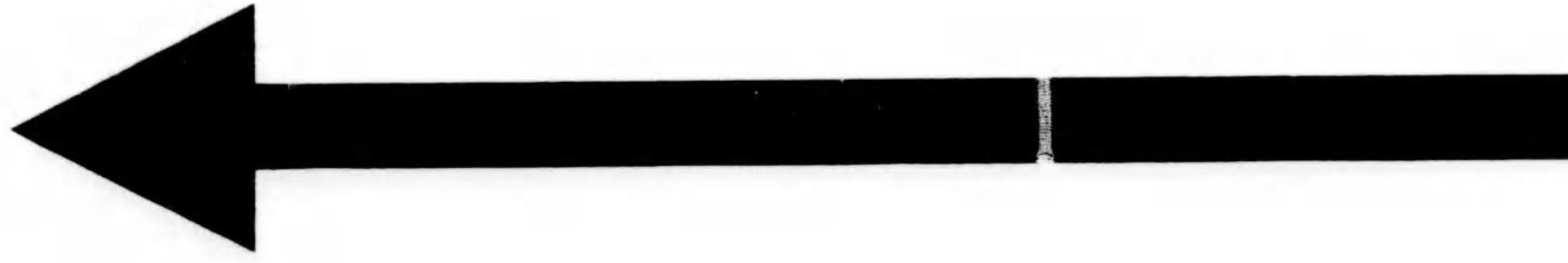
特100

446

親海聖人御傳鈔



始



特100
446



親鸞
聖人

御

傳

鈔

大正
2. 8. 8
丙交

聖人親鸞傳繪

緒言

本願寺聖人親鸞傳繪は略して御傳鈔と云ふ。上下二卷十五段あり。此は聖人の曾孫、本願寺第三世覺如上人の作なり。鈔主は聖人滅後第九年、文永七年に生れ、廿五歳にして報恩講式文を製し、廿六歳にして此祖傳を著したまへり。一代の著作頗る多し、其第二子從覺上人の慕歸繪詞、弟子乘專の最須敬重繪詞に詳かなり。文化八年は正に宗祖聖人滅後第五百五十年に當れり。易行院法海時に擬講たり。祖恩を報せんが爲めに此傳を講じ、式

文三段の名目を以て傳の十五段を分科す。一目瞭然たり
因て之を左に録す。

○本文大分爲二

| | |
|-----------|-----|
| 一讀自行德二 | 上● |
| 一眞宗興行德三 | 卷● |
| 一明聖道難行習學 | 第一段 |
| 二明淨土易行歸入二 | 第二段 |
| 一明安心相承 | 第三段 |
| 二明行狀指授 | 第四段 |
| 三舉本地結興行德 | |
| 二本願相應德四 | |

| | |
|----------|-----|
| 一明選擇眞影恩許 | 第五段 |
| 二明信片二座分別 | 第六段 |
| 三明信片一異問答 | 第七段 |
| 四舉本地結相應德 | 第八段 |
| 二嘆化他德三 | 下● |
| 一眞宗興行德三 | 卷● |
| 一明流利爲施化緣 | 第一段 |
| 二明興法利生願滿 | 第二段 |
| 三明偏執徒爲弟子 | 第三段 |
| 二本願相應德二 | 第四段 |
| 一明化導感權現敬 | 第五段 |
| 二明宗教除庶民惑 | |

案するに宗祖の降誕は今を距ること七百三十四年前なり。是を高倉天皇承安三年癸巳の歳とす。其四月朔日京都に生れたまへり。四歳にして父を喪ひ、八歳にして母を喪ひ、九歳にして出家し、廿九歳にして吉水入室の弟子となり、卅三歳にして選擇集の附屬と信行二座の分別あり、卅四歳にして信心一異の問答あり、卅五歳にして流罪の身となり、五十二歳にして教行信證を著はして眞

宗を開き、六十餘歳にして京都に歸りたまふ。七十歳にして定禪の夢あり。八十四歳にして蓮位の夢あり。其著書の年齢を擧ぐれば、淨土和讃、高僧和讃は七十六歳、愚禿鈔、三經往生文類、尊號眞像銘文は八十三歳、入出二門偈、往還廻向文類は八十四歳、淨土文類聚鈔、一念多念證文、唯信鈔文意は八十五歳、正像末和讃は八十六歳の作なり。而して龜山天皇弘長二年壬戌十一月廿八日九十歳にして遷化したまへり。其宗徒たる者は宗祖の心を心とし、確乎として抜くべからざる金剛の信心を決定し、

自行化他の芳觸を踐まざるべからず。

右は明治卅九年舊眞宗大學の御正忌に就いて、南條文雄師が施本用の『御傳鈔』に附記されたる者なり。尙今鈔を拜見するに當たりては、鈔主が聖人の自行化他全く私なき相を讃仰せられたることを注意せねばならぬこと、思ふなり。

大正二年癸丑七月上旬

住田智見識す

本願寺聖人親鸞傳繪与

第一段

夫、聖人の俗姓は藤原氏、天兒屋根の尊二十一世の苗裔、大織冠鎌子内の立孫、近衛大將右大臣贈左從一位内麻呂公號後長岡大臣、或號閑院大臣。贈正一位太政大臣房前公孫大納言式部卿眞楯息なり。六代の後胤、弼の宰相有國の卿五代の孫、皇太后宮大進有範の子なり、しかあれば、朝廷に仕て、霜雪をもいたゞき、射山に超て、榮華をもひらくべかりし

人なれども、興法の因うちに萌、利生の縁ほかにも
よほし、によりて、九歳の春のころ、阿伯從三位範
綱卿つなのきやうの于時、從四位上前若狹守、後白河前大僧正、慈圓慈鎮和尙、
殿御息、月の貴坊へ相具奉て、鬢髪を剃除し給き、範
輪殿長兄の貴坊へ相具奉て、鬢髪を剃除し給き、範
宴少納言公なごのきみと號す。自爾以來しばし、南岳天台の玄
風を訪てひろく、三觀佛乘の理を達し、ここしなへ
に楞嚴横川の餘流を湛て、ふかく四教圓融の義にあ
きらかなり。

第二段

建仁第一の曆春のころ上人廿九歳、隱遁のころ、ろざしに
ひかれて源空聖人の吉水の禪坊たづねに尋まいり給き、是
則世くだり人つたなくして、難行の小路せうろまよひやす
きによりて、易行の大道だうだうにたもむかんなり、眞宗
紹隆の大祖聖人、ここに宗の淵源をつくし、教の理
致をきはめて、これをのべ給に、たちどころに、他
力攝生の旨趣を受得し、飽まで、凡夫直入の眞心を
決定くみちじやうしましけり。

第三段

建仁三年亥癸四月五日夜寅の時、上人夢想の告ましましき。かの記云、六角堂の救世菩薩、顔容端嚴の聖僧の形を示現して、白衲の袈裟を著服せしめ、廣大の白蓮華に端坐して、善信に告命してのたまはく行者宿報設女犯、我成玉女身被犯、一生之間能莊嚴臨終引導生極樂文救世菩薩善信にのたまはく。これはこれわが誓願なり。善信この誓願の旨趣を宣説して、一切羣生にきかしむべしと云云。爾時善信、夢中にありながら、御堂の正面にして、東方をみれば

峨々たる岳山あり。その高山に、數千萬億の有情群集せりさみゆ。そのとき告命のごとく、此文のころを、かの山にあつまれる有情に對して、説きかじめ畢とたばわて、ゆめさめ畢云云。倩この記録を披てかの夢想を案ずるに、ひこへに眞宗繁昌の奇瑞、念佛弘興の表示也。しかれば聖人後のとき、たほせられて云。佛教むかし西天より興つて、經論いま東土に傳る、是偏に、上宮太子の廣徳、山よりもたかく海よりもふかし。我朝欽明天皇の御宇に、これを

わたされしによつて、すなはち浄土の正依經論等、
此時に來至す。儲君もし厚恩をほごこしたまはずは
凡愚いかでか弘誓にあふことをねん。救世菩薩はす
なはち儲君の本地なれば、垂迹興法の願をあらはさ
んがために、本地の尊容をしめすところなり。抑又
大師聖人源もし流刑に處せられたまはずは。我又配
所にたもむかんや。もしわれ配所に趣むかずんば、
何によつてか邊鄙の群類を化せん。是なを師教の恩
致なり。大師聖人すなはち勢至の化身、太子又觀音

の垂迹なり。この由へにわれ二菩薩の引導に順じて
如來の本願をひろむるにあり。眞宗これによつて興
じ、念佛これによりて熾なり。是併ら、聖者の教誨
によつて、さらに愚昧の今案をかまへず、彼二大士
の重願、たゞ一佛名を專念するにたれり。いまの行
者、錯て脇士につかふるここなかれ。たゞちに本佛
をあふぐべしと云云。故に上人親鸞傍に皇太子を崇
たまふ。けだしこれ、佛法弘通の浩なる恩を謝せん
がためなり。

第四段

建長八年丙辰二月九日夜寅時、釋の蓮位夢想の告云
聖德太子、親鸞上人を禮し奉て曰、敬禮大慈阿彌陀
佛、爲妙教流通來生者、五濁惡時惡世界中、決定即得
無上覺也。しかれば祖師上人は、彌陀如來の化身に
てましますといふことあきらかなり。

第五段

黒谷の先徳空在世のむかし、矜哀のあまり、ある
ときは恩許を蒙て製作を見寫し、或時は眞筆を降し

て名字を書賜。すなはち顯淨土方便化身土文類六云

親鸞上人 しかるに愚禿釋鸞、建仁酉曆、棄雜行二兮歸

本願、元久丑乙歲蒙恩恕二兮書選擇同年初夏中旬第

四日、選擇本願念佛集内題字、并南無阿彌陀佛往生

之業念佛爲本、與釋綽空、以空眞筆令書之、同

日、空之眞影申預、奉圖畫。同二年、閏七月下旬

第九日、眞影銘以眞筆、令書南無阿彌陀佛、與若

我成佛十方衆生、稱我名號下至十聲、若不生者不取

正覺、彼佛今現在成佛當知本誓重願不虛、衆生稱念

必得往生之眞文也。又依夢告、改綽空字、同日、以御筆、令書名之字畢。本師聖人、今年七旬三御歲也。選擇本願念佛集者依禪定博陸法名圓照之教命、所令選集眞宗之簡要、念佛之奧義攝在斯、見者易諭誠是、希有最勝之華文、無上甚深之寶典也。涉年涉日、蒙其教誨之人、雖千萬、云親云疎、獲此見寫之徒甚以難、爾既書寫製作、圖畫眞影。是專念正業之德也。是決定往生之徵也。仍抑悲喜之淚、註由來緣云云。

第六段

凡源空聖人在生のいにしへ、他力往生の旨をひろめ給しに、世あまねくこれにこそり人こそくくこれに歸しき。紫禁青宮の政を重ずる砌にも、先黄金樹林の蔭にころをかけ、三槐九棘の道を正する家にも、直に四十八願の月をもてあそぶ。しかのみならず、戎狄の輩、黎民の類ひ、これをあふぎ、これを貴ずこいふことなし、貴賤轅をめぐらし、門前市をなす。常隨昵近の緇徒そのかずあり。都三百八十

餘人よじんと云云。しかりこいへごも、親まのあたりその化くまをうけ、
懃ねんごろにその誨たしなをまもる族やから、甚はなはだまれなり。わづかに五六輩ごりくはい
にだもたらず。善信ぜんしん聖人しやうじんあるごき申まうしたまはく。予難よなん
行道ぎやうだうを閣さしたきて易行道みやうだうにうつり、聖道門しやうだうもんを遁のがれて、淨土門じやうどもん
に入いりしより以來このかた、芳命ほうあいをかふるにあらずよりんば、
豈あに出離しゆり解脫げだつの良因らういんを蓄たくはへんや哉。喜よろこびの中の悦よろこび、なにごごか
これにしかん。しかるに同室どうしちの好よしみを結むすんでごもに、一いち
師しの誨たしなをあふぐ輩ごら、これ多おほしこいへごも、眞實しんじちに報土ほうど
得生とくじやうの信心しんじなを成じやうじたらんごご、自他じたたなじくしがた

し、故かゝるがゆゑに、且かつは當來たうらいの親友しんゆうたるほごをもしり、且かつは
浮生ふしやうの思出おもひいでごもしはんべらんがために、御弟子おんでし參集さんじふ
の砌みきりにして、出言しゆつごんつかふまつりて、面々めんめんの意趣いしゆをも
試こころみんごたもふ、所望しよまうありご云云。大師だいし聖人しやうじんのたまはく
この條てうもごもしかるべし。すなはち明日みやう日にち人々ひびび來臨らいりんの
ごき、たほせられいだすべしご。而しかるに翌日よくじつ集會しふかいのごこ
ろに、上人しやうじん鸞らんのたまはく。今日こんにちは、信不退しんふたい、行不退ぎやうふたい
の御座みざを、兩方りやうほうにわかたるべきなり。何いづれの座ざにつき
たまふべしごも、各各おの／＼示給しめしたまへご。そのごき三百餘人さんびやくよじん

の門侶、みな其意をわざる氣あり。于時、法印大和尚位聖覺并に釋の信空上人法蓮、信不退の御座に可着云云。次に沙彌法力實入道遲參して申云。善信の御房の御執筆何事哉。善信上人のたまはく。信不退。行不退の座をわけらるゝなり。法力房申て云。しからは法力もるべからず。信不退の座にまいるべし云云。仍これをかきのせたまふ。こゝに數百人の門徒群居すといへども、更に一言をのぶる人なし。これ恐くは、自力の迷心に拘て、金剛の眞信に昏が

いたすところ歟。人みな無音のあひだ、執筆上人親自名をのせたまふ。や、暫ありて、大師聖人たほせられて云く。源空も信不退の座につらなり侍るべし。そのとき、門葉あるひは屈敬の氣をあらはし、あるひは鬱悔のいろをふくめり。

第七段

上人親のたまはく。いにしへわが大師聖人空の御前に、聖信房、勢觀房、念佛房、以下の人々たほがりしとき、はかりなき諍論をしはんべることありき。

その由へは聖人の御信心ごしんじむも、善信ぜんしんが信心しんじむといさゝか
もかはるごころあるべからず、たゞ一也ひとつなりと申たりし
に、この人々ひとびとがめていはく、善信房ぜんしんぼうの、聖人の御
信心しんじむも、我信心わがしんじむとひこしと申る、ご謂いはれなし、いか
でかひごしかるべきご。善信申て云いはく。なごかひごし
ご申まうすざるべきや。其故そのゆゑは深智博覽しんちひろらんにひごしからんご
も申まうすばこそ、まごごにたほけなくもあらめ。往生わうじやうの
信心しんじむにいたりては、ひごたび他力信心たうりきしんじむのごごはりを
うけたまはりしより以來このかた、全くわたくしなし。然聖しかればしやう

人の御信心ごしんじむも、他力たうりきより給たまはせたまふ、善信ぜんしんが信心しんじむ
も他力たうりき也。故ゆゑにひごしくしてかはるごころなしと申まうす
也。ご、申侍まうしはかりしごころに、大師聖人だいししやうにんまさしくたほせら
れて云のたまはく、信心しんじむのかはるご申まうすは、自力じりきの信しんにさりての
事也。すなはち智慧各別ちゑかくべちなるが由へに、信又各別也しんまたかくべちなり
他力たうりきの信心しんじむは、善惡ぜんあくの凡夫ぼんぷごもに佛ぶつのかたよりたま
はる信心しんじむなれば、源空げんくうが信心しんじむも、善信房ぜんしんぼうの信心しんじむも、
さらにかはるべからず。たゞ一なり。我わがかしこくて
信しんずるにあらず。信心しんじむのかはりあふてたはしまさん

人々は、わがまいらん浄土へはよもまいりたまはじ
よくくこゝろねらるべき事なり云云。こゝに面
面舌を巻、口を閉てやみにけり。

第八段

御弟子入西房、上人親の眞影をうつし奉ごたもふ
心ざしありて、日ごろをふるころに、上人その心
ざしあるこゝをかゞみて、たはせられて云。定禪法
橋七條邊にうつさしむべし。入西房鑿察の旨を隨喜
して、すなはちかの法橋を召請す。定禪左右なくま

いりぬ。すなはち尊顔に向たてまつりて申していは
く。去夜、奇特の靈夢をなん感ずるころなり。そ
の夢の中に拜したてまつるころの聖僧の面像、い
まむかひたてまつる容貌に、すこしもたがふこころ
なしこいひて、たちまちに隨喜感歎のいろふかくし
て、みづからその夢をかたる。貴僧二人來入す。一
人の僧のたまはく、この化僧の眞影をうつさしめん
ごたもふこゝろざしあり。ねがはくば禪下筆をくだ
すべし。定禪問て云、彼化僧たれひごぞや。件の

僧の云く、善光寺の本願の御房これなり。こゝに定禪たなごゝろをあはせ、ひざまづきて、ゆめの中にたもふやふ、さては生身の彌陀如來にこそ、身の毛いよだちて、恭敬尊重をいたす。また御くしばかりをうつされんに足ぬべし云云。かくのごく問答往復して、夢さめをはりぬ。しかるに、いまこの貴坊にまいりてみたてまつる尊容、夢中の聖僧にすこしもたがはずこて、隨喜のあまりなみだをながす。しかあれば夢にまかすべしこて、いまも御くし

ばかりをうつしたてまつりけり。夢想は仁治三年九月廿日夜なり。つらくこの奇瑞をたもふに、聖人彌陀如來の來現といふこと炳焉なり。しかればすなはち、弘通したまふ教行、たそらくは彌陀の直説といひつべし。あきらかに無漏の慧燈をかゝけて、こそく濁世の迷闇をはらし、あまねく甘露の法雨をそゝぎて、はるかに枯竭の凡惑をうるほさんがためなり。仰べし信ずべし。

本願寺聖人親鸞傳繪下

第一段

淨土宗興行によりて、聖道門廢退す。これ空師の所爲なりとて、たちまちに罪科せらるべきよし、南北の碩才憤申けり。顯化身土文類六云。竊以聖道の諸教は行證久廢淨土の眞宗は證道今盛然諸寺釋門、昏教兮不知眞假門戶、洛都儒林、迷行兮先辨邪正道路。斯以興福寺學徒、奏達太上天皇成、

號後鳥今上諱爲仁、號聖曆承元卯歲、仲春上旬之候。羽院、今上土御門院、聖曆承元卯歲、仲春上旬之候。主上臣下、背法違義、成忿結怨。因茲、眞宗興隆太祖源空法師、并門徒數輩、不考罪科、猥坐死罪。或改僧儀、賜姓名、處遠流。予其一也。爾者已非僧非俗。是故以禿字爲姓。空師并弟子等、坐諸方邊州、經五年之居緒云々。空聖人、罪名藤井元彦配所土佐國多、鸞聖人、罪名藤井善信、配所越後國府此外門徒、死罪流罪皆略之。皇帝諱守成、號聖代建曆未歲、子月中旬第七日、岡崎中納言範光卿をもて、

勅免。此時聖人右のごごく、禿字を書て奏聞し給に
陛下叡感をくだし、侍臣たほきに褒美す。勅免あり
ごいへごも、かここに化をほごごさんがために、な
ほしばらく在國したまひけり。

第二段

聖人越後國より常陸國に越て、笠間郡稻田郷ごい
ふごごころに、隱居したまふ、幽棲を占ごいへごも道
俗跡をたづね、蓬戸を閉ごいへごも貴賤衢に溢。佛
法弘通の本懐ごに成就し、衆生利益の宿念たちま

ちに満足す。この時、聖人たほせられてのたまはく
救世菩薩の告命をうけしいにしへのため、すでにい
まご符合せりご。

第三段

聖人、常陸國にして、専修念佛の義をひろめたま
ふに、たほよそ疑謗の輩はすくなく、信順の族はた
ほし。而に一人の僧云々ありて、動すれば佛法に怨
をなしつゝ、結句害心をさしはさんで、聖人を時々
うかごひたてまつる。聖人板敷山ごいふ深山をつね

に往返したまひけるに、彼山にして度々相待といへ
ごも、更にその節をこげず。つらく、緯の参差を案
ずるに、頗る奇特のたもひあり。仍、聖人に謁せん
ごたもふこゝろつきて、禪室に行て尋申に、上人左
右なくいであひたまひけり。すなはち尊顔にむかひ
たてまつるに、害心たちまちに消滅して、あまさへ
後悔の涙禁じがたし。やゝしばらくありて、有のま
まに日來の宿鬱を述すといへごも聖人又たごろける
いろなし。たちごころに弓箭をきり、刀杖をすて、

頭巾をとり、柿衣をあらためて、佛教に歸しつゝ、終
に素懷をこげき。不思議なりし事なり。すなはち明
法房これなり。上人これをつけたまひき。

第四段

聖人、東關の堺をいで、花城の路にをもむきま
しましけり。或日晚陰にたよんで箱根の險阻にかゝ
りつゝ、はるかに行客の蹤をわくりて、漸人屋の樞
にちかずくに、夜もすでに曉更にをよんで、月もは
や孤嶺にかたふきぬ。于時、聖人あゆみよりつゝ、

案内したまふに、まことに齡傾たる翁の正く束装たるが、いごころなくいであひたてまつりて云やう社廟ちかき所のならひ、巫ごもの終夜あそびし侍にたきなもまじはりつるが、いまなんいさゝかよりあはんべるご思ほごに、夢にもあらず、うつゝにもあらず、權現被仰云、たゞ今、われ尊敬をいたすべき客人、この路をすぎたまふべき事あり。かならず慇懃の忠節を抽で、殊に丁寧の饗應を儲くべしと云云。示現いまださめたはらざるに、貴僧忽爾ごして

影向したまへり。何ぞたゞ人にましますん。神勅是炳焉なり。感應もとも恭敬すべしと云て、尊重囑請したてまつりて、さまざまに飯食を粧、いろくには珍味を調けり。

第五段

聖人故郷に歸て往事をたまふに、年々歳々夢のごとし、幻のごとし、長安洛陽の栖も、あごをこゝむるに嬾ごて、扶風馮翊ごころくに移住したまひき五條西洞院わたり、これ一の勝地なりごて、しばら

く居をしめたまふ。今比、いにしへ口決をつたへ、
面受をさげし門徒等、をのく好をしたひ、路をた
づねて参集したまひけり。そのころ、常陸國、那荷
西郡大部郷に、平太郎ながしと云庶民あり。聖人
の訓を信じて、專貳なかりき。而に、或時件の平太
郎、所務に駈れて熊野に詣すべしとて、事のよしを
尋申がために、聖人へまいりたるに、被仰云。夫聖
教萬差なり。いづれも機に相應すれば巨益あり。但
末法の今時、聖道門の修行にをひては成ずべからず

則我末法時中億々衆生起行修道未有一人得者といひ
唯有淨土一門可通入路と云云。此皆經釋の明文如來
の金言なり。而今、唯有淨土の眞説に就て忝彼三
國の祖師、をのくこの一宗を興行す。所以愚禿勸
るごころ更に私なし。しかるに一向專念の義は、往
生の肝腑自宗の骨目なり。すなはち三經に隱顯あり
といへども、文といひ義といひ、ごもにもて明なる
をや。大經の三輩にも、一向と勸て、流通にはこれ
を彌勒に付屬し、觀經の九品にも、しばらく三心と

説て、これまた阿難に付屬す、小經の一心つゝゐに諸佛これを證誠す。これによりて論主一心を判じ、和尚一向を釋す。しかればすなはち何の文によることも一向專念の義を立すべからざるをや。證誠殿の本地すなはちいまの教主なり。かるがゆへにこてもかくても衆生に結縁のころさしふかきによりて、和光の垂迹を留たまふ、垂迹をこゝむる本意、たゞ結縁の群類をして願海に引入せんとなり。しかあれば、本地の誓願を信じて一向に念佛をこゝせん輩、公

務にもしたがり、領主にも駈仕して、その靈地をふみ、その社廟に詣せんこと、更に自心の發起するところにあらず。しかれば、垂迹にたひて、内壞虚假の身たりながら、あながちに賢善精進の威儀を標すべからず。たゞ本地の誓約にまかすべし、穴賢穴賢神威をかるしむるにあらず、努力々々冥眊をめぐらしたまふべからずと云云。これによりて平太郎熊野に參詣す。道の作法こりわき整儀なし。たゞ常没の凡情にしたがつて、さらに不淨をも刷ここなし。行

住坐臥ぢうざぐわに本願ほんげんをあふぎ、造次ぞうじ顛沛てんぱいに師教しけうをまもるに
はたして无爲むゐに參着さんちやくの夜よ、くだんの男夢告おとゆめつげ云い、證誠しょうじやう
殿でんの扉ひらを排はきて、衣冠いくわんたゞしき俗人ぞくじん仰たほせられて云い、
汝何なんぢなんぞわれを忽緒こつしよして汗穢あせ不淨ふじやうにして參詣さんけいするやこ
そのさきかの俗人ぞくじんに對坐たいざして聖人しやうにん忽爾こちじこしてまみぬ
たまふ。その詞ことばにのたまはく、彼かれは善信ぜんしんが訓おしなによつ
て念佛ねんぶちするものなり云云。爰こゝに俗人ぞくじん笏しやくをたゞしく
して、ここに敬屈けいくちの禮らいを著あつゝ、かさねて述のぞこころ
なしこみるほごに、ゆめさめをはんぬ。たほよそ、

奇異きいのたもひをなすここといふべからず。下向げかうの後のち、
貴坊きぼうにまいりて、くはしく、此旨このむねを申まうすに、聖人しやうにんその
こことなりこのたまふ。これまた不思議ふしぎの事ことなりかし

第六段

聖人しやうにん、弘長こうちやう二歲に壬戌に仲冬ちゆうとう下旬げじゆんの候こうより、いさゝか不
例れいの氣きまします。自爾より以來これのかた、口くちに世事せいじをまじへず、
たゞ佛恩ぶつおんのふかきこことをのぶ。聲こゑに餘言よごんをあらはさ
ず、もはら稱名しょうみやうたゆるこことなし。しかうして同第八
日にち時じ頭づ北面ほくめん西右脇さいうけうに臥給ふしたまひて、つゐに念佛ねんぶちのいきたぬ

をはんぬ。于時、頽齡九旬に満たまふ。禪房は長安馮翊の邊、押小路南、なれば、はるかに河東の路を歴て洛陽東山の西麓、鳥邊野の南のほこり、延仁寺に葬したてまつる。遺骨を捨て、同山の麓、鳥邊野の北邊、大谷にこれをたさめ畢ぬ。しかるに、終焉にあふ門弟、勸化をうけし老若、をの／＼在世のいにしへをたもひ、滅後のいまをかなしみて、戀慕涕泣せずといふことなし。

第七段

文永九年冬のころ、東山西麓鳥邊野の北、大谷の墳墓をあらためて、同麓よりなを西、吉水の北の邊に、遺骨を堀渡して、佛閣をたて影像を安ず。此時に當て、聖人相傳の宗義いよく興じ、遺訓ますく盛なること、頗在世のむかしにこゝたり。すべて門葉國郡に充滿し、末流處々に遍布して、幾千萬といふことをしらす。其真教を重して彼報謝を抽ることもから、緇素老少面々にあゆみを運で、年々廟堂に詣す。凡聖人在生の間、奇特これたほしといへども、

羅縷に違あらず。しかしながら、これを略するところなり。

奥書云

右縁起畫圖之志、偏爲知恩報德、不爲戲論狂言、
剩又染紫毫、拾翰林、其跡尤拙、其詞是苟、付冥
付顯、有痛有耻。雖然、只憑後見賢者之取捨、無
顧當時愚案之訛謬而已。

于時、永仁第三曆、應鍾中旬第二天至晡時、終
草書之篇畢

畫工法眼淨賀樂寺

大正二年七月廿五日 印刷
大正二年八月一日 發行



編輯者 住田智見

發行兼印刷者 西村七兵衛

不許複製

發行所

京都市東六條

法

藏館

電話下四五八番
大阪口版一七〇四番

274
333

大正二年八月一日

...

...

...

...

...

...

終

